

師弟の距離を

縮める切れ味

明治期から続く伝統の「博多包丁」の後継者を目指している宮崎春生さん(25)は長崎県五島市に16日、5年間修業を積んだ福岡市中央区清川の大庭利男さん(72)のかじ工場を1年ぶりに訪れた。大庭さんは大相撲の土俵作りに欠かせない「土俵グワ」を全国でただ一人作る職人。九州場所は1年間使い込まれた「土俵グワ」を修理し、来年に備える、グワにとっても「納めの場所」。大庭さんは、すべての技の未来の継承者になってほしいと弟子に温かいまなざしを向けている。

包丁職人宮崎さん訪問

1年ぶり修業したかじ工場

師匠「少しは成長した」

福岡市



師匠の大庭利男さん(左)に包丁の出来を見てもらう宮崎春生さん

宮崎さんは2004年「手に職を付けた」と3代続く「大庭鍛冶工」の門をたたいた。何年もさばけるところから「一本包丁」とも呼ばれる

る博多包丁。5年間で基礎を学び、昨年7月、五島市で独立した。

経験を積みほかに技術の未熟さを自覚、そのた

びに大庭さんに電話で教えを請う。1年ぶりに駆け出しの地に戻り、職人としての原点である包丁

の出来栄を見てもらった宮崎さん。「師匠の仕事を見てできるだけ多くの技を学びたい」

師の技に近づいたための試金石になりそうなのが、強度と切れ味が求められる土俵グワ。刃先の厚さたったの2ミ。約千

度の窯の中に刃を入れ、鋼のかげらを刃先に置いて溶かしのぼす「焙烙流し」という九州独特の製法が用いられている。温度管理には熟練の勘が必要。大庭さんも任せられるまで約20年かかった。

弟子の仕事ぶりを見ながら「少しは成長したよ

うだけとまだまだ」と手て初めて最後の弟子。「私

笑んだ。